

# 震災支援ルポ

県立図書館が実施した支援活動の中から、野田村立図書館と岩泉町小本保育園、大槌町立図書館で行った活動に参加した職員のルポルタージュを掲載します。被災した図書館の実際、被災地の現状が伝われば幸いです。

## 野田村立図書館の 支援図書仕分・被災図書修復

5月31日火曜日、普段の年ならうららかな日差しが降り注ぐ穏やかな季節のはずであるのに、今年は精神的にも季節を楽しむ気持ちにはなれないまだ5月とは思えない寒さでした。野田村に向かう途中の葛巻の峠の電光掲示板には「凍結注意」の表示も出るほどで、この日の最低気温は0.8度だったとのこと。

到着して目に入った野田村立図書館は津波に建物全てが襲われ、かろうじて外壁や屋根は残っているものの窓ガラスはほとんどなく、その中に残念ながら廃棄しなければならない資料、後世に残したい資料が分別されて置かれていました。それらは綺麗な状態のものは一冊もなく、総ての資料が海の泥にまみれている状態でした。

作業は全国から支援物資として送られてきた図書の仕分けと水浸しになった図書の修復の二組に分かれて行われました。



[野田村立図書館 被災図書修復作業]

支援図書仕分け作業は、図書館に隣接した体育館に約350箱16,000冊の一般、児童、絵本等が総て混じった状態で箱詰めになっていたものを一般書はそれぞれの分類ごとに、児童書は読み物とそれ以外に、そして絵本といった具合に図書館職員のみで

蔵書として適切か否かを判断しながらの分別作業でした。これらの箱の中には心のこもったメッセージが入ったものもあり、送ってくださった方の思いが伝わってきました。

送られてきた図書を一日も早く新しい図書館に並べ、一人でも多くの村民の方に利用していただくためには、これからまだまだたくさんの作業が必要です。微力ながら少しでもお手伝いが出来ればと思いました。

一方、水浸しになった資料の修復作業は、国立国会図書館収集書誌部の職員指導の下、海泥がこびりついた資料の泥をブラシでこそげ落とし、一頁一頁に入り込んだ細かな泥を丁寧に刷毛で掃き出し、カビが生え始めているものはアルコールで拭いて消毒し、さらには資料の大きさに合わせて中性紙で作った保存函に収めるといふ、どうしても多くの人手を要するものでした。

ガラスの入っていない窓から吹きすさぶ寒風の中での作業にあたる人たちの疲労はいかばかりだったかと思いますが、どのスタッフにも貴重な経験であり資料修復技術の一端に触れるよい機会だったのではないのでしょうか。

寄贈図書の仕分け作業も資料の修復作業も、このように地道な人の手による長期間の支援がなければ被災図書館の復興への道は拓けて行かないのではと思いました。

(池田 由美子・似内 千鶴子)

## 岩泉町小本保育園 読み聞かせ支援

7月22日(金)に被災地へ読み聞かせに行くことになり、さあプログラムはどうしようかと支援活動に行くことに決まった担当者と話し合った。「とにかく笑顔で楽しんでもらいたい」との思いから歌と体遊びを取り入れることにし、『おおきなかぶ』(エプロンシアター)『ねずみきょう』(紙芝居)『へんしんトンネル』(大型絵本)『かえるのうた』(歌&体遊び)手遊びで決定しました。

県担当2名と児童スタッフほか3名の計5名で現地へ。途中の道路のすぐ近くには仮設住宅が、海沿いにはがれき等がまだ残っていて津波の恐ろしさを感じました。小本保育園は建物が被災してしまったため、仮設である岩泉農村婦人の家に間借となっていました。

思いのほか子どもたちはとても元気いっばいの様子。そのまま温かく迎えられ読み聞かせが始まりました。「へんしんトンネル」は特に大好評で、アンコールもわき起こり子どもたちとの一体感が生まれました。子どもたちの目の輝きと笑顔からは楽しんでくれていることがひしひしと伝わり、別れぎわにみんなとハイタッチした時「もっと読んで。明日もまたきてね!」と言ってくれた言葉がとてもうれしく強く心に残りました。



[小本保育園 読み聞かせ]

ただ被災したことにより、子どもたちは以前よりかなりハイテンションになってしまっているということでしたが、それは今までとは違った場所や環境での生活のせいだということを保育園の先生か

らお聞きし心が痛みました。このお話を聞いて被災された方々が元のように暮らせるようになるまでの道のりはまだまだ遠いのだと現実に引き戻される思いでした。

絵本は、子供たちに夢と勇気と考える力、そして想像力という楽しさを与えてくれます。今回の読み聞かせが、被災地で我慢を強いられてきた子供たちの緊張した心をほぐし、笑顔を取り戻すきっかけとなる大切な活動なのだと改めて実感しました。子どもたちの笑顔と笑い声があふれる姿が、大人の皆さんに生きる活力を湧きあがらせてくれるのだと思います。今後も被災地からの要望にいつでも応じられるようプログラムを充実させ、積極的に支援していきたいと思っています。

(西田 めぐみ)

## 大槌町立図書館の 支援図書仕分作業等

9月21日水曜日、大槌町を訪れるのはこれで何度目だろうか。

震災後に初めて訪れた時、町並みの変わりように愕然としたものである。あの場所にあったお店、この場所にあった建物、そのほとんどが瓦礫の山となっていた。そして、大槌町立図書館は、建物自体が残っていたものの、その内部は見るも無惨な状況であった。図書資料は全て流失しており、津波の恐ろしさをまざまざと見せつけられたことを覚えている。

町の多くが被災し、町長以下町職員の多くの方が亡くなり、まちの復興が優先され、図書館の職員の方もなかなか対応できないこともあり、詳細な調査を行ったのは6月7日であった。その後、8月18日にも訪れ、その後の状況について話を伺った。

個人的に何度か足を運んでいたこともあり、震災直後からの復旧・復興の様子は見ていたが、

あまりにも多くの瓦礫があり、撤去するのはやはり大変な作業であろう。震災から半年を経過したが、未だ瓦礫の一部が残っていた。

仮設図書館として開館する予定である大槌町中央公民館を訪れ支援活動を行った。その内容は寄贈図書の仕分け作業、既存資料の仕分け作業、そして今後町の職員で図書館を運営できるよう資料に係るアドバイスなどである。

寄贈図書は、約2万4千冊もあり、箱詰めされたダンボールの中にそれぞれの中身が分かるようにリストが入っていたり、分類ごとに仕分けされていたりと、寄贈された方々の思いが伝わってきた。この日は、そのうちの約1万冊を仕分けた。その後は、公民館図書室時代に使用されていた部屋を仮設図書館として検討しているため、残されていた資料の中で不要なものの仕分け作業を行った。



[大槌町中央公民館 寄贈図書仕分け]

ちょうどこの日は、ボランティアの方7、8名が寄贈された図書にバーコードやラベルの貼付け、ジャケット止めの作業を黙々と行っており、頭が下がる思いであった。



[大槌町中央公民館 ボランティアの方々]

大槌町立図書館では、館長以外の職員が異動しており、臨時職員の司書が2名配置されたものの、図書館経験者がいないため、引続き様々な点でアドバイスを行っていく必要がある。しかし、採用された2名の司書の前向きな姿勢を見て、きっと素晴らしい図書館が開館するのではないかと感じている。

引続き、県立図書館の職員として大槌町立図書館の再建に向け、ソフト面の支援なども含め、できる限りの支援活動を行っていきたい。

(菊池 和人・神久保 貴幸)